

寒河江八幡宮

地元の角田さん、遺志継ぎ奉納へ

随神門 次代へのゲート



随神門の巨大な部材を確認する角田裕一さん(左)と森浩二さん
＝寒河江市越井坂町



角田さんの設計を元に造られた随神門の3分の1模型。実際は木の趣を生かした色にする

150年ぶり建立 木の趣生かし、7月竣工式

果物加工品製造・販売などの角田商事(寒河江市)会長の角田裕一さん(72)＝同市栄町＝が、同市中心部に位置する寒河江八幡宮(鬼海智美宮司)に奉納する随神門の建造に取り組んでいる。門が建つのは約150年ぶり。安全面などに配慮し形状を工夫し、華やかな装飾は極力避ける。「時代に合わせて進化する、永遠に未完成の門にしたい」との願いを込めており、7月14日に竣工式を予定している。

随神門は神域を守る随神を「て建っていたが、明治初期の祭る門」で、同八幡宮にもかつ 神仏分離令による混乱の中、

市内の常林寺に移されたとき。角田さんは2007年に参集殿が新設された際、事業の実行委員長を務め、当時の宮司だった故鬼海智美さんから「随神門を建てるのが夢」と聞かされていた。その跡を継いだ先代宮司の瑞光さんは50歳で17年に亡くなり、建立

を果たせなかったため、角田さんが遺志を受け継いだ。設計は角田さん自身が担い、門の高さを約7.5メートル、屋根は幅約10メートル、奥行き約3.5メートルとした。参拝客への落雪対策として屋根の両端が高い形状にする。波を切って進む船の先端部分を参考に、屋根の内部に多数の木材を組み合わせて強度を高める構造にした。

大江町産の西山杉などを素材に使い、昨年7月から同社工場で行っている。棟梁を務める建築士森浩二さん(46)＝同市落衣前＝は、社寺の建造物を担当するのは今回が初めて。「試行錯誤が続くが、職人仲間と工法を話し合い、挑戦するのが楽しい」と笑顔を見せる。

事前に作った3分の1模型は黒、赤を基調にしたが、実際は木の趣を生かした色にする。上部に掲げる扁額(へんがく)の「随神門」などの字は、親交がある書家金沢翔子さんに角田さんが依頼した。内部には、同八幡宮弊殿にある市指定有形文化財の木造随神像2体を移す。

奉納は、同社の創業100周年記念事業のメインに位置づけている。角田さんは「かつてない随神門になる。細かな装飾や彩色はあえて行わず、後の世に託す」と話し、門が時代をつなぐ存在となることを願っている。

(三沢秀樹)